



新しい21世紀へ向けて！ 学習会&流域情報 特集

- P1 ますます活発！新河岸川流域の市民活動
- P2-3 新河岸川流域川づくり学習会報告
- P4-5 新河岸川流域情報地図

新河岸川流域情報

- P6 森のアトリエ
 環境まちづくりフォーラム
- P7 白子川 湧き水シンポジウム
 身近な川の一斉調査報告会
- P8 新河岸川流域フォーラム開催決定！



いよいよ 21世紀！

ますます 活発！新河岸川流域の市民活動

明けましておめでとうございます。
 今年も宜しくお願いします！

いよいよ新しい世紀が始まりました。今年の2月には「新河岸川流域フォーラム」の開催が予定されており、着々と計画が進められています。そのためのイベントと新所沢事務所の開設記念を兼ね、昨年12月16日に「新河岸川流域川づくり学習会」が開催されました。その中で、新河岸川流域の市民活動紹介もされました。各支川流域の活動を簡単に紹介します。

■不老川流域川づくり市民の会

都市化に伴って生活水が流入し、生き物も姿を見せなくなった不老川に、昨年の夏に魚の生息が確認され、今後は、より多くの生物がすめる川に向けて活動を重ねています。

■砂川堀流域川づくり懇談会

都市下水路と呼ばれる砂川堀ですが、源流部には野生のヘイケボタルの生息が確認されています。現在は、農業と川づくり、環境教育の連携を試みる活動を重ねています。

■柳瀬川流域川づくり市民懇談会

新河岸川流域で最も広い流域を占め、各流域で個性的な活動が行われています。上流部は多摩湖、狭山湖があり、流域を考慮するうえでも重要な流域と言えます。

■黒目川流域川づくり懇談会

水質が良好で多くの魚がすんでいます。湧水の多い落合川では開発の見直し、黒目川では改修工事計画のワークショップが市民の手で進められ、自然環境が守られています。

■(仮称)白子川流域懇談会

驚くほどの湧水に恵まれており、その水環境とそれを育む生活文化の保全に向けて、流域市民が懇談会の立ち上げを準備しています。

新河岸川流域川づくり学習会

日時 平成12年12月16日(土)
場所 所沢市生涯学習センター

新河岸川流域川づくり連絡会新所沢事務所の開設を記念して、『新河岸川流域川づくり学習会』を開催しました。

宮村忠教授のご講演と、新河岸川流域の市民活動の紹介という内容で約50名の方々にご参加戴きました。

講演記録

□新河岸川の特徴

新河岸川の5支川は櫛のような形で新河岸川に向かって流れている。新河岸川はもともと非常に水が流れ難い川で、そこに流域の丘陵化と大変な勢いで都市化が進み、こういった状況も含めて、全国でも稀な川といえる。新河岸川流域は、全体としては大規模な形としての水害は比較的に少ない。今から約50年前、70年前に比べると、水害が増え、第二次大戦を機会に大きな変化がでてきた。

□土地の視点

農地が市街化区域になった頃、富士見市に住んでおられ、地域の水防団に所属し、洪水に対してはも意識が高い方が「こんな所まで、本当に都市になるの?」という不安を晩年の日記に記されていた。日記には大きなことではなく、その地域の農民としての生活が日記に丹念に書かれており、纏められていた。農民の辛い生活や仕事、その土地に立脚した条件を基に話が展開されており、洪水の話とも密接に関係している。日本の土地条件のなかで生まれた作品は、必ず土地条件が記されており、それは重要なことである。

□中国黄河の場合

中国の北部、特に黄河では水がなくなる。洪水と海水の時の差が大きくなり、その点は日本の川に似ている。変化の激しい川は、川幅が広い。水が少ない洪水時は水が広く流れる。

プログラム

- 1) 開会挨拶 建設省荒川下流工事事務所長 工藤 啓
- 2) ご講演 『住民の川へのかかわり方』
宮村 忠 先生 (関東学院大学工学部教授)
- 3) 新河岸川流域の市民活動の紹介
 - ①不老川流域川づくり市民会
 - ②砂川堀流域川づくり懇談会
 - ③柳瀬川流域川づくり市民懇談会
 - ④黒目川流域川づくり懇談会
 - ⑤(仮称)白子川流域懇談会
- 4) 新所沢事務所の紹介
- 5) 閉会

黄河は、黄土高原ができていて程砂を持ってくる川として突出している。現在は、まわりの地面より12メートルほど川底が高い。そのため、一番怖いのがモグラの穴で、モグラを見つけた人には、堤防が壊れたら、被害を受ける周辺の人達から高価が出される。シロアリとモグラの対策が、黄河の重要な河川の管理である。

□黄河の砂

黄河周辺では雨が集中して降り、普段はほとんど降らない。川に水が無くなり、その砂が偏西風に吹かれて日本にやってくる。2月、3月に東京でも窓が砂で汚れるが、それは黄河から飛来する砂である。

□黄河の断流

ここ5年くらいの間に、黄河の断流ということが盛んにテレビでいわれている。「あの黄河がまでもが、とうとう途中で水がなくなり、海に到達しなくなった」と、それは環境破壊、水資源の拡大が原因で、大変なことだといわれている。しかし、黄河の断流は、20年前から毎年1回は必ずあり、近年の変化ではない。確かに黄河は、沢山の開発をしているが、それは黄河の流れがないのではなく、地上から十数mをこえる程川底が高いため、普段の少ない水は、下に潜ってしまう。そのため、河口近くで伏流している。

□伏流水の利用

都市での取水は、河床が高いため川の表面にある水ではなく、伏流水をとる方が便利である。黄河の水は土色だけれど、伏流水は、魚も住めないようなきれいな水が出てくる。

□水田開発

中国の乾燥地帯で水田を開発するには、そこ中で水が蒸発してしまうため、水田までに経由する水の確保が大変である。水田に溜めておく水の9割くらいは、稲が吸うわけではなく農業用水として戻ってくる。黄河の場合は、田んぼに入れた途端水が蒸発してしまう。



写真上: 講師 宮村 忠 先生



写真下: 講演会風景

□三峡ダム工事と長江の効果

長江の物流は、幹線道路13本を合わせたほどの効果があるといわれている。長江には平行した鉄道や道路はない。道路は長江に直行する形でできていない。今では、水位が上がり、岩床が難所となり3000トンの船の通行が限界であるが、三峡ダムができることにより、その3倍の大きさの船が通行可能となる。しかもその距離は東京-神戸間ほどあり、その効果は大きい。

□三峡ダムのもう一つの目的

三峡ダムのもう一つの目的は、水にうえている北へ水を持っていく、「南水効果」にあるだろう。交通体系を表している「南船北馬」という言葉があるように、中国の風土的な輸送は、南方は水ばかり、北はほこりだらけだ。南の長江にある豊かな水を北の黄河へもつてくる「南水北調」という水資源開発の構想の一つのステップとして、三峡ダムが位置付けられている可能性が高い。

「黄河の水が足りない!これは大変なことになる、世界の環境問題のなかで、なんとかしなくては」ということから三峡ダムの水を黄河へもつてくれないか、という話にそのうちなるだろう。

□中国人の構想

中国人は、計画と構想(ある種の哲学)をはっきりと分けている。三峡ダムは、貯水地の長さが560キロメートルで、1万トンの船が上るという大規模のダムである。三峡ダムを作ると言うことは、中国人にとっては、すごく悩みになっている。構想に百年悩む、構想から計画になっても40年近く悩んでいる。司馬遼太郎は「中国は大規模な開発には臆病な国だ」と述べたが、大きな工事をする、その王朝は滅びるということ、歴史的に何回も経験しており、長い中国の伝統的な知恵、史的観点からみると臆病になるを得ない。

中国人に対して外国人は「100万人の犠牲を出しているいいんですか?」等と批判しているが、それはしたたかな中国人が既に百年以上前から悩まされてきた事で、中国人が一番良く知ったうえで工事なのである。

□日本の河川法とドイツの環境法

日本で新しく河川法が改正され、日本の河川法におされてと言っている。長江には平行した鉄道や道路はない。道路は長江に直行する形でできていない。今では、水位が上がり、岩床が難所となり3000トンの船の通行が限界であるが、三峡ダムができることにより、その3倍の大きさの船が通行可能となる。しかもその距離は東京-神戸間ほどあり、その効果は大きい。

川はまっすぐではなく、曲けた方がよい。川に改修をしたら、近自然に戻すということが環境法に書かれている。直線より蛇行させると流れが悪くなり、氾濫地を作ることが河川にとって一番良いとされている。

日本は河川法であるのに対し、ドイツは一段上の環境法から捉えているから良いとか、直線、自然工法、市民参加を明文化している点などをほめている人はいるが、ドイツは氾濫する場所に人がいないから、それが可能なのだ。ドイツは法律でも、水の排水問題が重要で、基本的には河川法が不要で、川の水量ではなく質に問題がおかれる。一方、日本では、多い場合でも少ない場合でも水量が問題なのである。

□その川独自の視点

ヨーロッパの河川の事例や川の同じことでも差があり、1つの河川の事例を別の川にあてはめると違ってくる意味になることが多い。新河岸川は新河岸川であって、北上川でも、荒川でもない。しかも新河岸川流域の支川1本ずつも、異なっている。その違いを見つけることは大変なことだが、それができなければネットワークはつけれない。

□土地を知るために

生活している方々が、皆で考え、皆で行動する基本になるのは、その土地の条件を知っているかどうかにかかわる。構想に百年悩む、構想から計画になっても40年近く悩んでいる。司馬遼太郎は「中国は大規模な開発には臆病な国だ」と述べたが、大きな工事をする、その王朝は滅びるということ、歴史的に何回も経験しており、長い中国の伝統的な知恵、史的観点からみると臆病になるを得ない。

その土地に基盤をおいていた人はどういう人かと言えば旧住民のひとで、新しく入った新住民とは行動のパターンが異なり、市民活動のうな動きが必要となる。2つのグループができてしまうのは勿体無い。

□新河岸川流域の難しさ

古くから様々な伝統技術があり、それは、「古い」ことではなく、その途中に新しいことが入りながら今だに続いてきている。伝統技術を支えてきた旧住民の中へ、新住民が入らなくて摩擦ができてしまいかもれない。

こういった点からしても、新しく市街化した川を見るのは難しい。氾濫と無縁の場所が面積的には多く、そこへ人が入ってくるし、僅かな氾濫場所にまで人が入ってくる。そこがこの流域の難しいところである。

□これらに注意深く見守りたい

氾濫をしていないところの人は、無縁かと言えばそうではなく、加害者にもなっている。新河岸川の downstream の隅田川の近くに住んでいる私達にとっては、新河岸川流域という上流部に住んでいる皆さんが加害者。「なんでこんなに汚しちゃったの?」と思う。加害者の方々の生活ぶりを注意深く見守りたい。

質疑応答(一部) ■質問 □解答

- 水防団の伝統が現在、見られないが実際はどうなっているのですか?
□都市部では、壊滅しており、郊外でも減ってきている。消防団のひとが兼務しており、100万人が水防の作業しており、そのうちの約1割の10万人くらいが専任している。
- まちづくりと川づくりを一緒に考えるにはどうすればいいのですか?
□川の良い場所等は、自分の秘密にしておきたいもの。無理に川とまちづくりを結び付けることもない。

ご講演の後、新河岸川流域の自然環境を守り、より安全なものへするための積極的な流域の市民活動が紹介されました。(P1を参照)



写真: 流域の活動紹介の様子

新河岸川流域情報地図

2000年12月25日 作成地図

この地図は新所沢事務所にあり、みなさんから寄せられる情報により、地図の情報は常に(新河岸川流域フォーラムまで)更新されます。

新河岸川の歴史

新河岸川は、川越と江戸を結ぶ舟運が盛んで、物資や人も多く行き交い、都市と農村を結ぶ重要な役割を果たしていました。新河岸川やその支川には、河岸場や渡し場ができ、河岸集落も栄えました。しかし、その後の鉄道敷設などの整備が進み、約300年に渡る新河岸川の舟運は昭和6年に途絶えてしまいました。

記号表示説明

	魚の情報
	湧き水の豊かな場所
	自然の豊かな場所(池や沼も表す)
	人とかわっている情報(公園、文化施設、ワークショップなど)
	上下水道にかかわる情報
	工事が進行または計画されている場所



森のアトリエ

2000年11月19日
都立 狭山公園
主催 森のアトリエ実行委員会

企画内容

森の案内人

永島高行 (日本野鳥の会会員)
『雑木林の鳥と虫』
永石文明 氏 (ネイチャーライター)
『土の中には何がいるかな?』

森のギャラリー

落ち葉のじゅうたんの色付いた木々のなかに大きなドームも登場しました。

森のカフェ

森の中で美味しい手作りケーキやパン、焼きいもなどを味わいました。

森からの情報発信

森はもちろん、森と関係の深い川のことなど、狭山丘陵周辺をパネルで紹介されました。

多摩湖の畔にある都立狭山公園で「第8回森のアトリエ」が開催されました。秋晴れのなか、2回行われたフィールドワークでは色付いた木々のなかを歩きながら、鳥や植物について勉強し、自然と触れあいました。

森のギャラリーでは、武蔵野美術大学の学生が制作した和紙のドームが展示され、ドーム内に敷かれた落ち葉の匂いや和紙に映し出される木の葉の影を楽しみました。美しいモングル民謡も披露されました。

森のカフェでは美味しい手作りケーキや焼き芋、温かい飲み物を味わえ、森からの情報発信では、狭山公園周辺の自然や河川、遺跡の紹介が展示されました。訪れた方は、楽しい秋の1日が満喫できたようでした。

写真：開催風景



写真上：案内人と、森を散策中
写真下：森の宝物記憶&探生ゲームに挑戦



写真下：森に登壇した和紙のドーム



環境まちづくりフォーラム

2000年11月24日～26日
埼玉県志木市総合センター
主催 環境まちづくりフォーラム実行委員会

企画内容

●24日 事例報告
1. 市川市/2. 日野市/3. 滑川町
4. 新河岸川流域

●25日 分科会
フィールドワークとワークショップ

第1分科会
『志木をフィールドとした
Eコマースプラザづくり』

第2分科会
『川とまちづくり』(新河岸川流域)

第3分科会
『環境プラン・環境監査とまちづくり』

第4分科会
『エネルギーとまちづくり』

●26日 全体共有会

第2回環境まちづくりフォーラムが柳瀬川と新河岸川の合流地点もある志木市で開かれました。全国のまちづくりの事例紹介と、1日かけたフィールドワークとワークショップが行われ、充実した3日間でした。

第2分科会では、新河岸川流域での環境まちづくりを考えました。まず、新河岸川流域の情報提供として①「川とまちづくり-東久留米では」②「市民対話の川づくり(黒目川改修)」③「水循環マスタープランづくり」についての報告がされました。

次にハザードマップを作成するためフィールドワークへ出かけました。旧河川の道筋を辿りながら歩き、いろは橋では河川改修と野火止用水の歴史を垣間見ました。柳瀬川の旧河川にはフナとコイとアブラハヤが多くいました。旧堤防を歩き、輪中や水塚を見ながら、洪水と付き合う生活の知恵と川の変遷を実感しました。

ワークショップでは、地図上で浸水地帯と、水塚をマーキングし、志木市周辺の地形と川との関係を確認し、同時にその歴史を振り返りました。そこから、流域で考えるまちづくりの視点として柱になること(以下の2点)が考えられました。

①地域の歴史や風土などを知るといふ地域の風土や産業についての探究と考察から、その地域らしさを浮かび上がらせることによる「自然も人のつながりも循環に沿った地域づくり」へと意識が向かいました。そこから「めぐる」という言葉へ辿り着きました。②その土地に元来あるもの(文化や自然)を見つめる「風土のデザイン」と、人が集い、同じ目的に向かって活動が生まれ、社会との関わりも含めた人との保わり合いが育む「住むためのデザイン」の相互関係が重要だといふ「風土土流まちづくり」が考案されました。

その土地の風土や産業を意識し、その流域独自のものを見つめながら人と人がつながり、更につなげていくことの大切さが確認されました。

白子川 湧き水 シンポジウム

2000年12月2日
白子コミュニティセンター
主催 白子川流域環境協議会
(板橋区、練馬区、和光市)

企画内容

午前 湧き水見学会

和光市を中心とした、白子川周辺にある湧き水の見学をしました。

午後 湧き水シンポジウム

—プログラム—

報告「湧き水調査に参加して」
北村嘉男氏 (練馬区)
講演「残したい身近な湧き水」
みずとみどり研究会 金子博氏
報告「小金井市の水循環回復の取り組み」
小金井市建設部下水道課 田中芳雄氏
提案「白子川流域懇話会の復活を」
須貝郁子氏 (和光市)

シンポジウムの行われた午前に、白子川の和光市周辺にある湧き水を2グループに分かれ見学しました。コースは、熊野神社(湧き水の池と滝がある)、滝坂(昔は道の両側から湧水が流れ出ていた)、旧川越街道(台地を切り崩した道で湧水が多い)、地福寺(湧水の池と水場がある)、神護寺(数年前までは水行場があった)、寺前橋(昔は水田の広がりが見渡せた場所)、開発の現状(傾斜地をどのように建てられているマンション)、百段階段(湧水を貯留している台地にある階段)の8ヶ所です。豊かな湧水が残る風景に感動すると同時に、それらが無くなっていくこととしての危機感が伝えられました。

午後からのシンポジウムでは、貴重な湧水をどのように捉え、守っていくか、地域としてどんな取り組みができるのかを報告事例や講演を参考に考えられました。

「湧き水調査」で確認できたこととして、白子川流域では、生活は勿論、生物も自治体の境界に関係なく湧水や白子川と共に生活しており、それらを市民と行政が流域として協力し、それらを守っていくことの大切さが

報告されました。

講演では、湧水の守られた各地の事例から、市民のできることから始める重要さと、流域全体で考える水循環の確保について話されました。また、行政の取り組みの事例として小金井市の雨水浸透マス設置の普及について報告がされました。

最後に白子川流域の貴重な湧水やそれに係わる生物や生活文化を守るべく活動の提案がされました。シンポジウムをきっかけとした、今後の市民活動や行政と市民の連携した取り組みが期待されます。



写真上：ハケから水がにじみ出ているが、それは減少している。

写真左：滝坂の富沢さんの自宅で、湧き水を試飲中。

身近な川の一斉調査 報告会

2000年12月10日
朝霞市産業文化センター
主催 新河岸川水系水環境連絡会

企画内容

- 1) 2000年の調査概況報告
所沢北高等学校 丹野忠弘氏
- 2) 志木市宗岡中学校科学部からの報告
- 3) 自由学園 生徒からの報告
- 4) 講演:小倉紀雄教授(東京農工大学)
- 5) その他流域の活動報告等

身近な川の一斉水質調査報告会が行われました。今年の調査(6月11日開催)では、参加団体は41団体、28河川とその周辺の湧水など221ポイントの調査測定値が集められました。雨の中で行われたため、雨水の影響により興味深い結果が得られました。

①「ECと透視度」グラフの解析から、雨水の影響がほとんど認められない流域がわかりました。雨天の場合、地質により水質がきれいでも透視度が落ちる場合がありますが、特に落合川流域(中でも南沢湧水付近)は、雨の影響を受けず、透視度が高いままでした。こういった環境は、将来的に残しておきたい場所であると報告されました。

②雨水により水質が希釈されたにも関わらず、CODとEC、NO₂-N、NH₄-Nの値が特異的に高い流域がありました。東川下流域では生活排水の流入や水処理水の影響等、複数の原因が考えられますが改善が望まれました。③また「ECとCOD」のグラフにおいては、雨水の影響が表れない野火止用水も特徴的でした。水質は良くはないのですが、水が流れる器としての素晴らしいさが伝えられました。

講演では『市民が関与した環境測定の影響について』として「市民環境科学(市民が身近な環境を調べ、得られた結果を整理し、実態を明らかにする)事例が紹介され、新河岸川流域での水質調査が年々活発になっていく要因は何だろうか?という問いかけがされました。

今年も、学校教育との連携も図られ、報告会でも参加した生徒からの活動報告がありました。また、魚類調査も積極的に行われ、そうしたネットワークや活動の広がりが、水質調査の活動そのものを元気づけていることが確認されたようでした。



写真：自由学園生徒の発表風景。
注釈 EC：電気伝導度 COD：化学的酸素消費量 NO₂-N：亜硝酸性窒素 NH₄-N：アンモニア性窒素

● 流域 INFORMATION ●

新河岸川流域フォーラム 開催決定！

フォーラムの内容が決まり次第、お伝えします。お楽しみに！

新河岸川流域フォーラムの開催が決定しました。分科会の内容など、続々と決まり始めています。「地域が学校へ歩み寄り、学校が地域へ飛び出す」そんな取り組みを、川を介してできるのだろうか？それはどんなことができて、何に注意しなければならないのだろうか？身近な自然環境、生活文化や知恵、様々なルールをひとりひとりが意識しながら、新河岸川流域での環境学習、地域づくりを考えられるフォーラムにしたいと考えております。

- 問い合わせ先 建設省荒川下流工事事務所 調査課 総合治水係 TEL 03-3902-3220 FAX 03-3902-2346
- ホームページ <http://www5.ocn.ne.jp/~singasi/index.html> E-mail: singasi@vesta.ocn.ne.jp

新河岸川流域フォーラム

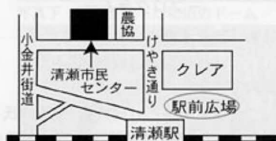
テーマ 川と流域に学ぶ社会

2001年 2月18日(日) 午前10時開会

清瀬市民センター

会場案内図

西武池袋線 清瀬駅より徒歩5分



会場連絡先 清瀬市立清瀬市民センター
TEL (代) 0424-93-4011
住所 清瀬市元町1-6-6

主催 ◆新河岸川流域総合治水対策協議会◆

建設省関東地方建設局・埼玉県・東京都・所沢市・朝霞市・入間市・大宮市・上福岡市・川越市・狭山市・志木市・新座市・富士見市・和光市・大井町・三芳町・板橋区・北区・練馬区・清瀬市・小平市・立川市・田無市・東久留米市・東村山市・東大和市・保谷市・武蔵村山市・瑞穂町

◆新河岸川流域川づくり連絡会◆

建設省荒川下流工事事務所 調査課 不老川流域川づくり市民の会 砂川堀流域川づくり懇談会
柳瀬川流域川づくり市民懇談会 黒目川流域川づくり懇談会 (仮称) 白子川流域懇談会

ホームページが開設されました！

新河岸川流域川づくり連絡会のホームページを開設しました。新河岸川流域の紹介や、『新河岸川流域フォーラム』の案内などを掲載しております。ぜひ、御覧下さい。また、ホームページや「里川」のご感想、ご意見をEメールでお寄せ下さい。

ホームページ: <http://www5.ocn.ne.jp/~singasi/index.html>

E-mail: singasi@vesta.ocn.ne.jp

● 事務局から ●

今年は、「新河岸川流域フォーラム」もあり、新河岸川流域の市民活動の新しいネットワークが広がることも期待しています。より一層新河岸川流域での活動が充実することを目指し、事務局一同頑張りたいと思っています。